

今年度第2回の郷土史講座

＜戊辰戦争 我々の先祖はいかに戦ったか＞

和井内和夫氏の講話に61人が出席

談会郷土史



3月15日(土)に開催した26年度第2回郷土史講座に61人の参加がありました。出席者のうち会員が21名、一般40名でした。

講師は盛岡タイムス社から刊行されている「盛岡藩の戊辰戦争」(序、続、終章の三連作)の著者である和井内和夫氏(盛岡市在住84歳)。

講話の中で和井内氏は「戊辰戦争は、明治維新、日本の変革期において“起こるべくして起きた戦争”と位置づけるのは間違い。これは、薩摩、長州の両藩が東北の特定の藩(会津、庄内両藩)に対して仕掛けた“私怨のための戦争”である。」と切り出しました。和井内氏はそのいきさつをこう説明しました。

幕府が政権を朝廷に返還(大政奉還)し恭順の意を表明していた慶應2(1866)年、当時会津藩主松平容保(かたもり)は、天皇がおわす京都の町の安寧を守る京都守護職の要職にあった。その頃京の町では薩摩藩士らの乱暴狼藉が目にとり、幕府の命で会津藩はこの者たちを厳しく取り締まっていた。

一方江戸でも薩摩藩は幕府を挑発しようと浪人や無頼漢を雇い、町人に対してゆすりや強盗、放火などをくり返していたため、幕府は庄内藩に命じて、その「盗人宿」ともいえる薩摩藩邸を攻撃、焼失させた。

慶応4(1868)年1月、鳥羽伏見で会津藩と薩長軍が激突、これに勝利した薩長軍は、藩閥政府名で仙台、盛岡両藩に対し「会津討伐命令」を出し、さらに4月には、秋田藩に対して「庄内討伐」を命じた。

会津、庄内両藩の京都と江戸での行動は幕府の命に従っただけであり、薩摩藩から恨まれる筋合いはなかったのであるから、これは薩長藩閥政府の見せしめの意味を込めた復讐、私怨以外の何物でもなかったのである。

これに対して東北諸藩(のちに越後藩も)は米沢藩と仙台藩の主導で、その宥怨(ゆうじょ・許しを請うこと)嘆願を行ったが、総督府から却下された。このことにより平和的解決は不可能であるとして、諸藩の集まりは軍事同盟としての性格が強い奥羽越列藩同盟に発展した。しかし同盟各藩の思惑、行動には温度差があった。

そこへ、九条道孝公を総督に約600名の奥羽鎮撫軍が東北へ進攻して来たのである。

総督九条道孝公一行が雫石・臨濟寺に一泊して秋田に転進

“奥羽鎮撫”という御旗を掲げて、海路仙台入りした九条総督一行は、会津攻撃の檄(げき)を飛ばすものの、幹部で強硬派の世良修蔵が福島で暗殺されるなど東北諸藩から予想以上の反発を受けた。不穏な空気を感じた総督軍は仙台藩の“引留め”工作を振り切って(ここで総督に逃げられたのは仙台藩の大失態、と和井内氏は指摘)、盛岡に向かった。

盛岡に20日間ほど逗留後、総督一行はより安全とみた秋田への転進を図る。6月24日盛岡を発った一行600人が雫石村の臨濟寺を本陣に周辺民家に泊まった。和井内氏は、この時の状況は、雫石町史第1巻の記述に尽きるとして、あえて詳述はしませんでした。

その代わり、秋田転進の先発隊となった若い醍醐副総督の場合は、盛岡を発ってその日のうちに国見峠越えをして秋田に入ったが、九条公は馬にも乗れず、歩くのも容易でないため、やむを得ず雫石一泊となった、というめったに聞けない裏話を披露しました。

偶発的だった！？「橋場口の戦い」

さらに「雫石・橋場口の戦い」について和井内氏は「盛岡藩兵と長崎振遠隊の衝突は偶発的なもの」と解説しました。

「戊辰戦争史」では、盛岡藩の降伏は9月25日である。ところが「盛岡藩の国見峠警備隊と官軍長崎振遠隊との戦い」は9月28日となっている。盛岡城内での「降伏判断・下知」と橋場や雫石の警備隊との連絡不十分がもたらしたものと和井内氏は指摘する。

そして、その背景にはこんな事実があったと述べました。——朝廷直轄の部隊である「長崎振遠隊」の隊長は九州鎮撫総督の沢宣嘉(さわのぶよし)、奥羽鎮撫副総督の沢為量(さわためかず)の婿養子であった。

養父の東北での苦戦をきいて300人ほどの兵を引き連れ戊辰戦争に参戦していたが、同隊は連戦連敗。そこに「盛岡藩降伏！」の報。さらに「長崎振遠隊が先鋒となって盛岡城に入れ。」の命が届いた。同隊の意気は大いに上がり、勇躍国見峠を越えた来た所で、降伏の報を聞いて半信半疑で下山中の盛岡藩の橋場警備隊と遭遇。両者の戦意が暴発したのではないかと解説。本来は流さなくても良い血を流してしまった悪い例だったと残念がった。これも長年研究を続けておられる和井内氏ならではの「なかなか聞くことのできないお話し」でした。



九条道孝公

楡山佐渡は「秋田藩との戦いに気が進まなかった…」？

「雫石」に関するもう一話。戊辰戦争の最大の謎の一つ「主攻正面に鹿角口を選んだ理由」である。盛岡から秋田藩・久保田城下が一番近いルートは、雫石から藩境の国見峠を越えて角館経由で進む経路である。開戦前秋田に向かった九条鎮撫総督の一行も、また終戦後、官軍の盛岡占領軍の第一陣もこのルートを通っている。それなのに、なぜ“北大回り”の鹿角ルートをとったのか。「国見峠路は狭い」とか、



おなじみ楡山佐渡の肖像画。

実直か愚直か、盛岡藩の去就を決めた佐渡の決断の評価は未だ定まっていない。

当時秋田南部から攻め上がっていた仙台藩や庄内藩とともに「秋田藩に二面作戦を強いるため」などと諸説あるがどれも説得力を欠く。和井内氏は、自ら深読み？としながらも「戦争初期の列藩同盟軍の大攻勢からすれば、奥羽鎮撫軍の東北撤退は近く、秋田藩が同盟に復帰するのは、そう遠くない、と考え、もともと恨みがあるわけでない秋田藩との戦いを避けるため、遠回りして時間稼ぎしたのではないかと推察してみせました。」

「輪王寺宮」をかついだ「東北朝廷」のことも…

講話ではこのほかに、「盛岡藩の去就—楡山佐渡の決断（鎮撫軍が盛岡駐留中にもかかわらず、佐渡が仙台に長期滞在した謎）」、「東北朝廷をめざして祭り上げたく東武天皇（輪王寺宮・明治天皇の叔父、上野寛永寺住職）」について、「当時の戦闘の実態について（東北各藩の藩士は主君の恩顧に「手柄」で報いる単独行動の「旧態依然」、官軍は「徴集による国民兵」で「高い練兵度」。これが勝敗の帰趨を分けた。）」など興味深いお話しをしてくださいました。

最後に、鹿角電報電話局長として赴任した和井内氏が戊辰戦争の研究の道に入るきっかけとなった鹿角市の栗山文次郎先生（1886～1965・紫根染めの大家、人間国宝）との出会いによって、盛岡藩士だった先祖の墓が同市の寺院にあることを教えられたお話も、運命

を感じさせる感銘深いものでした。

今回の講座のために当会では雫石町史からの抜粋など三種類の資料を用意し、出席者全員に配りました。また、欠席会員にはこの会報とともに配付します。興味深い資料ですので、どうぞご利用ください。

当会のホームページを開設しました

総会終了後、一般に公開

25年度事業としていたくインターネット上の「滴石史談会ホームページ」の立ち上げ作業がこのほど完了しました。4月26日の定期総会で披露したあと一般に公開します。

当会のホームページ作成は——雫石町内の郷土史資料等の保存活用並びに町内文化財等を広く紹介することを通じて当史談会の対外的な情報発信力を高めよう——と始めたもので、郷土史愛好者の交流の場や町のイメージアップの一助になることも期待しています。

今回作成した内容は、「史談会の概要」、「当面する行事等のお知らせ」のほか、「郷土の史跡紹介（手始めは秋田街道沿線から）」、「戸沢氏について」などの項目で、知りたい情報を検索できます。また、「子供の歴史コーナー」も設けました。さらに当会会報のうち平成23年1月発行の第17号から本年1月発行の第25号までを全て収録、また会員の自主研究発表の資料などもデータ化されているものから順次載せています。

町民はもとより、町出身者さらには広く国内の郷土史愛好者が雫石の歴史を知る機会として利用することが期待されます。

このホームページの立ち上げ作業は実質的に今年2月から始まり年度内に終わることができました。当会のホームページの特徴は、他のホームページの開設や運営にあたって専門業者任せのケースが多い中、当会では「無料のソフト」を利用して一から手づくりで進めたことです。また、会員の調査研究の成果を随所に採り入れているところは他にない特徴です。

さらに経費も格安で、開設にあたって外部の業者に支払うのはレンタルサーバー契約代行料金3,000円と初期費用の1,000円のみ。今後の負担は「サーバー利用料・年間5,000円」と「ドメイン利用料・年間1,800円」の6,800円だけとなります。これらの予算は平成26年度予算(案)に計上しています。

今回の作成作業に参画した会員は、吉原 修、赤坂昌雄、高橋 司のお三人です。今後のサイトの運営も当面このメンバーで行う予定です。メンバーは「今後も随時新しい情報や資料を掲載していきます。会員の皆さんからも情報提供をお願いします。」と意気込んでいます。

ホームページのアドレスは、<http://shidankai.sakura.ne.jp> です。〈滴石史談会〉でも開くことができます。どうぞご覧ください。

理事の高橋氏から会員に書籍の贈呈がありました

当会会員で理事の高橋與右衛門氏（黒沢川行政区在住）が、このほど「岩手県の金山と産金事情」の書籍(60p)を発行しました。高橋氏は昨年「日本の金銀山遺跡〔萩原三雄著・高志書院出版・389p〕」を分担執筆しました。その機会に岩手県全県の状況を調査研究し、取りまとめた原稿を今回前掲の書籍として印刷発行したものです。

今回高橋氏から「会員の皆様に差し上げて下さい。」と会員の人数分の本をいただきました。さっそくお手元にお届けいたしますのでどうぞご覧の上、ご利用ください。

高橋様、貴重な書籍を誠にありがとうございました。紙面をお借りして御礼を申し上げます。

